

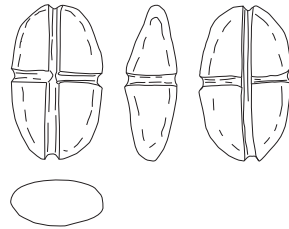
栃木県栃木市中根八幡遺跡

第4次発掘調査概要報告

ARCHAEOLOGICAL EXCAVATION OF THE NAKANEHACHIMAN SITE

ring-shaped earthen mound Jomon site,

Tochigi city; the fourth season short report.



中根八幡遺跡学術発掘調査団

Nakanehachiman Research Project

奈良大学・國學院大學栃木短期大学

Nara University and Kokugakuin Tochigi Junior College

栃木県栃木市中根八幡遺跡第4次発掘調査概要報告

中根八幡遺跡学術発掘調査団

1. 2018年度調査の概要

中根八幡遺跡は、栃木市南部（旧藤岡町中根）の渡良瀬遊水地（旧赤間沼）に面した台地縁辺部に立地する縄文時代前期～晩期、弥生時代、中世～近世の複合遺跡である。これまで環状盛土遺構を中心に調査を進めてきたが、前期・中期の土器も一定数出土している。また、環状盛土中央には中世～近世に寺院が営まれたとされており、これに関わると思われる遺構・遺物も確認している。これまでに年次報告（中根八幡遺跡学術発掘調査団2016～2018）と3年間の成果と課題をまとめた（中村・小林ほか2018）ほか、パブリック・アーケオロジーとして実施した音楽活動を報告した（早川・中村2019）。

今年度の調査もこれまでと同様に、奈良大学と國學院大學栃木短期大学の教員・学生による調査団を結成し、栃木市教育委員会の後援と、地元中根地区の協力のもと、学術発掘調査を実施することとした。

今年度の調査では、まずA区は昨年度同様掘り下げを進めた。特に斜面下方部を中心に調査を行い、骨片集中部などを確認した。C区では、昨年度調査区（中央窪地部分）から東側の高まり部分にかけて、5箇所ものトレンチを設けて調査を開始した。なお、B区は火山灰分析のための土層観察と土壌サンプリングのみを行った。

昨年度に引き続き現地説明会では多数の方々にご来場いただいたほか、展示やワークショップ等で遺跡の活用を図った。サポートをいただいた方々に改めて謝意を表したい。特に、塚本師也氏・早田勉氏からは現場でのご教示のほか、本稿に所見を寄せて頂いた。

（小林・中村）

2. 調査日誌

(1) 発掘調査

本年度調査においては調査団の学生・院生・卒業生が分担してFacebookページで随時調査状況を発信した。以下はそこから抜粋して編集した。

8月31日（金）曇→雨 國學院大學栃木短期大学より機材搬入。

9月1日（土）曇 本日より本格調査を開始した。國學院大學栃木短期大学日本史フィールドの学生・教員が現地に入り、A区周辺の草刈り、トレンチの復元し、その後昨年度のC区調査区を復元した。

9月2日（日）曇 午前中は中根八幡神社の池掃除・草刈りで集まった中根地区の方々に遺跡と出土物の説明を行った。A区は掘り下げを開始した。C区では新たにトレンチを3箇所設定し、掘り下げを開始した。午後には奈良大学の先発隊が合流した。

9月3日（月）晴 奈良大学の後発隊が合流した。A区は掘り下げを続行。C区はさらに1箇所トレンチを設定し、掘り下げを開始した。午後からは平板を使用し、池の東側の地形測量を開始した。

9月4日（火）曇→雨 作業続行。國學院大學栃木短期大学子ども教育フィールドの学生が体験発掘に参加した。台風接近のため14時で終了。

9月5日（水）晴 A区から耳飾りが出土した。昨年度調査したB区の壁面・床面を清掃した。

9月6日（木）晴 午前中は國學院大學栃木短期大学の人間教育学科と栃木市立小野寺南小学校が13年続けてきた表現活動交流会に中根八幡の土器を持ちこみ、全校児童を対象に「縄文土器を使って音楽を作ろう」と題する授業を行った。C区から打製石斧が出土した。

9月7日（金）晴 C区は写真撮影と平面図の作成を開始した。11時より栃木市のコミュニティFMであるFMくらら857の栃木市提供番組に中村と短大生、栃木市教育委員会文化課の高見氏が出演した。

9月8日（土）晴 午前中は、午後からの現地説明会に向けて遺構の精査やトレンチ周りの清掃、展示する遺物の準備等を行った。現地説明会には70名近い方々の参加があった。C区は埋め戻しを開始した。

9月9日（日）晴 宿舍の清掃。早田勉氏による土層観察とサンプリング。A区は土層断面図作成後、写真撮影を行った。撮影前のトレンチ精査時に小形の耳飾りが出土した。測量班は作業継続し、図面を完成させる。調査終了後、トレンチごとに埋め戻し、機材を短大に撤収して解散した。

(2) 整理作業

整理作業は、國學院大學栃木短期大学がA区、奈良大学がC区の出土品を担当し作業を進めた。國學院大學栃木短期大学では、後期授業開始とともに毎週火曜日の考古学演習・考古学フィールドワークを利用して整理作業を進めた。奈良大学では毎週月曜・水曜に考古学実習室において整理作業を行った。

(高垣・新里・荒木・吉村・唐川・志原)

3. A区における調査の概要

(1) 調査概要（第2図）

昨年度までの調査で、A1～A3グリッドはローム層まで掘削していたが、本年度はA4～A6グリッドについても北側50cm分のサブトレンチを設けてローム層まで掘り下げることが目標とした。併行して、作業空間と視界の確保のため南側50cm分および、A4～A6はさらに南側1m分（A4b～A6bグリッド）を掘り下げた。いずれも10cmの人工層位で掘り下げた（標高22.2mを基準に、例えば120cm～130cmの箇所から出土したものを-120Lと表記する）。A7グリッドについては、未掘削部分を層位ごとに掘り下げたが、一部A6グリッドにかかる部分の遺物もA7として記録したものがある。土層の堆積状況については昨年度の認識と変化はないが、A4～A6グリッドの-150L付近で骨片がまとまっていたほか、この周囲の4層は複雑で、細分される可能性がある。さらに掘り下げた段階で判断したい。また、A6グリッドの4層と5層の間に3～5cmの厚さの黒色土層がみられる。A1東壁で同位体分析、A4北壁で火山灰分析のための土壌をサンプリングした。同位体分析については東京大学総合研究博物館に委託しており、別途報告予定である。

骨片については、阿部常樹氏（國學院大學兼任講師）に同定を依頼した。上記を含め、各層から出土している。小破片ばかりで同定可能なものは極めて限られるが、イノシシのほかは、シカ角の可能性のある1点がみられるのみである。被熱しているものも多い。

(2) 出土遺物の概要

第3～5図には各グリッド・人工層位ごとに、時期幅を考慮して主要な土器を掲載した。精製土器では加曾利B1式～B2式、粗製土器では加曾利B式～安行式が大半を占めることは従来からの知見通りであり、今回掘削範囲には晩期のものは含まれない。8・54・55は前期中葉の黒浜式で、他に未報告だが2017年度調査で数片が出土している。139は中期初頭の五領ヶ台式の底部破片の可能性があり、中期前葉～中葉では、阿玉台I b式～Ⅲ式のほか、在地化した勝坂式と考えられる56・151がある。加曾利B式では比較的大形の斜線文系(30・91・103・144など)が目立つ。図示していないが、薄手の条線文の胴部小破片は多数出土している。159・160は耳飾である。石器は石鏃のほか、石錘4点(161～164)の出土が目立っている。石錘はA5-150L・170Lに集中しており、164は厳密な位置は不明だが、本年度の掘削範囲からみると、ほぼ同位置と推定される。(中村)

4. C区における調査の概要

(1) 調査の概要

中根八幡神社の南東に広がる田畑は、周辺よりも低くなっており、ここが環状盛土遺構の中央窪地部分にあたる。現在、この窪地はほぼ中央に中世の如来像が安置された観音堂が所在しており、中世から近世にかけて青蓮寺があったとされる。そのため、この周辺一帯には少量ながら中近世の遺物も確認でき、中世の削平を受けていることが予想される。昨年度は現在クリ林内にあたる中央窪地部分に2m四方のトレンチを設定したが、今年度はそこから東側の盛土方向へ調査区を設定した。調査区は、1mごとにグリッド番号を設定し、2m幅でトレンチを設定した。トレンチ間は、2mの間隔をあげ、5つのトレンチを設定した(第6図-1)。それぞれ、西からCa16・17、Ca20・21、Ca24・25、Ca28・29、Ca32・33の各地点である。掘り下げにあたり、10cmごとの人工層位を設定して作業にあたった。以下、各トレンチの概要を述べる。

まず窪地に近いCa16・17、Ca20・21地点(地点第6図-2・3)では、表土(1層)～3層はしまりの悪い砂質土で土器を若干含むがクリ林栽培の層と考えられる。土器は含まれるが少量で小片ばかりである。両トレンチともにこれより下層は掘り下げしていない。

Ca24・25地点(第6図-4)は、8・10層上面まで下げた後、北側にサブトレンチを設定した。表土(1層)・2層はクリ林栽培のための層と考えられ、3・4層では炭化したクリの塊がトレンチ内を南北に横断するように傾斜しながら伸びており、この層もクリ栽培に関わるものだと考えられる。5層は土器を多量に含んでいるがロームブロックは混じらない。6層からロームブロックが混じり始めるが、8層のブロックは6層からのロームが混じったものである。9層は11層を掘り込んでいる遺構で、埋土は4～6層に類似するので、中近世の可能性が高い。この9層の土坑上面から打製石斧が出土した。6層からロームブロックを含み始めているが、ソフトロームは中近世の削平によって確認できず、11層から黄褐色のハードローム層となり、土器は含まなくなるがスコリアを含む。また、北壁にてサンプリングを行った。サンプリングした層は、2層～9層で計17個(火山灰考古学研究所による)と12個(調査団による)のサンプルを採取した。サンプリング結果については別途記載する。

Ca28・29地点(第6図-5)は1～4層は後世の掘削による堆積にあたり、5層からロームブロックが混じりはじめ、9層、10層でソフトローム層を確認した。10層が4層によって大きく削平されているが西から東へと傾斜するローム層が続いていたと思われる。8層は7層からの落ち込み層と考えられる。4層は重機

による掘削の可能性があり、クリ林開墾に関係する削平の可能性がある。

Ca32・33地点（第6図-6）はクリの根による攪乱が激しく、根が少ない南側にトレンチを半掘したサブトレンチを設定し掘り下げていった。2層から4層はほぼ同一で、根の攪乱のため分層できるように見える。しかし、出土する土器の様相が他のトレンチと大きく異なっており、下方のトレンチ群とは違い削平をあまり受けていないと考えられる。Ca28・29地点から続くソフトローム層が5層下面で露出しており、黒色のプランを東西に確認した。遺構の可能性も考えられる。出土した土器は中期から晩期までで、他のトレンチと比較しても残存率が高い。

以上、各所でローム層を確認したが、窪地部分については中世以降における削平が認められ、現時点で詳細は不明である（第6図-1）。しかし、盛土付近にあたるCa32・33地点では中世の削平を受けておらず、遺構が残存している可能性が高い。
（小林・萱原・桐部・吉村・中山）

(2) 出土遺物の概要（第7図）

C区から出土した遺物は、縄文時代前期から弥生時代前期の土器、石器（打製石斧、石鏃、剥片など）、土製品（土製円盤、有溝土錘、土製耳飾）である。以下では、土器と土製品の概要を述べる。なお、本概要において、遺物はCa32・33地点（第7図-30のみCa28・29地点出土）のものに限定している。

縄文時代前期の土器は、黒浜式と諸磯a式がある。1は、2段LRの原体を横位に回転施文した単節斜縄文を施す。胎土に繊維を含む。黒浜式である。2は、2段LRの原体を斜位に施文した条の縦走する単節縄文を地文とする。細い半截竹管の内側による平行沈線で、器面を縦位に区画し、その間に弧状のモチーフを配したと思われる。諸磯a式と思われる。

縄文時代中期の土器は、阿玉台I b式、勝坂式系土器、加曾利E I 式、大木8b式期がある。3は、口縁に添って、半截竹管の内側を押し引きした複列の角押文を施す。阿玉台II式である。4は、口縁部の施文域に単列の角押文を斜位に密接して施文する。阿玉台I b式である。5は、口縁部にキザミを加えた隆帯を巡らす。以下縦方向の単列の角押文がみられる。阿玉台I b式である。6は、キザミを加えた隆帯がみられる中期中葉の土器である。在地の勝坂式系土器と思われる。7は、隆帯上にキザミが加えられ、三叉文の一部と思われるキザミがみられる。勝坂式系の土器と思われる。8は、間を沈線でなぞった2条の隆帯を口縁に巡らす。小波状口縁の波頂部を起点とする。波頂部から沈線を沿わせた隆帯が垂下する。加曾利E I 式後半の土器である。9は、栃木・茨城から福島にかけて分布する大木8b式期（加曾利E I 式後半）の中空突起の破片である。

縄文時代後晩期は、称名寺式、堀之内1・2式、加曾利B2式、曾谷式、北陸系土器がある。10～12は称名寺式であり、10は区画内に列点を配す称名寺II式の体部破片で、区画は帯状とはなっていない。11は、口縁が内側に短く屈折し、帯状区画文内部に単節斜縄文を施す。12は、屈折する帯状区画文内部に列点を配す。13は、櫛歯状工具による縦位の条線文を施す中期後半から後期前葉にかけての土器と思われる。14は、縄文地に縦方向の沈線を密に配す堀之内1式の新しい段階の体部破片である。15は、頸部が緩やかに括れ、体部が張る器形の土器で、括れ部より上を欠失している。括れ部には「8」の字状の貼付文を起点に横位の沈線を巡らす。貼付文下には、「U」字状の沈線文を配し、そこから縦方向に沈線を垂下させたと思われる。堀之内1式と思われる。16は、縦位の弧線・押捺文を基点とし口縁部に1条の沈線を巡らせたと思われる。基点から縦方向の沈線を垂下させる。堀之内1式の古い段階と思われる。17は、三角形の磨消縄文を配す堀之内2式の体部破片である。18は、僅かに肥厚した口縁部下に2条の沈線を巡らしている。以下は2段LRの

原体を横位に回転施文した単節斜縄文とする。加曾利B3式～曾谷式の鉢形土器と思われる。19は、横位の帯状の彩杉文がみられる加曾利B2式の体部破片である。20は、口縁部が内湾し2条の沈線と2段LRの原体を横位に回転施文した単節斜縄文とする。加曾利B2式である。21は、口縁部内面に浅い凹線を巡らす。外面には横位の沈線を、乱雑に、密に配す。加曾利B3式と思われる。22は、口縁部内面に1条の沈線を巡らし、外面には粘土紐を巡らして、押捺を加える。加曾利B式の粗製土器（紐線文土器）である。23は、肥厚した口縁にキザミを加え、その直下に沈線を施す。体部には細い沈線で斜格子目文を配したようである。後期後半の粗製土器と思われる。24は、口縁に山形の突起を付け、外面に斜位の沈線を、雑に、密に配す。加曾利B3式～曾谷式と思われる。25は、口縁にキザミを加えた隆帯を巡らす。波頂部から狭い磨消縄文を下方に放射状に配している。地文の縄文は2段LRである。曾谷式かと思われる。26は、注口土器の注口部の破片である。表面を丁寧に磨いている。後期中葉以前のもと思われる。27は、壺の頸部の破片であり、沈線間に列点がみられる。晩期の北陸系と思われる。

30は、弥生時代前期末の沖Ⅱ式に併行する土器である。短く外反する口縁部をもち、端部側と頸部側にややための沈線を有する。内外面に丁寧に磨きを施す。Ca28・29地点出土である。

土製品は、土製円盤と有溝土錘がある。28は、加曾利EⅡ式の胴部磨消懸垂文の部分を用いた土製円盤である。縄文は2段RLの縦回転と思われる。29の有溝土錘は、短軸、長軸上に溝を配す。溝部分の磨滅が認められず、あまり使用していない。
(塚本・小林・新里・桐部・佐々木)

5. 栃木市中根八幡遺跡におけるテフラ分析（第8図）

(1) B区のテフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析・屈折率測定）の概要

テフラ検出分析では、試料32（27層）で無色透明のバブル型、試料10（7層）で無色透明の中間型ガラスを少量検出した。また、試料4（2層）で、淡灰色、淡褐色、褐色、白色、灰白色のスポンジ状軽石型ガラスを少量認めることができた。岩相から、淡灰色、淡褐色、褐色のものは浅間Bテフラ（As-B, 1108年）、白色のものは榛名渋川二ッ岳テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）、そして灰白色の軽石は浅間C軽石（As-C, 3世紀後半）または浅間A軽石（As-A, 1783年）に由来すると考えられる。

また、テフラ組成分析では、赤土（いわゆるローム層）の上部に認められるような、火山ガラスや重鉱物組成の変化は認められず、多少の変動はあるものの、似たような火山ガラス、軽鉱物、重鉱物の含有率、火山ガラスの形態別組成、そして重鉱物組成の傾向が認められた。いずれの試料でも火山ガラスでは中間型ガラスが優勢で、軽鉱物が比較的多く含まれている。また、重鉱物には斜方輝石や単斜輝石が多い。さらに、試料18に含まれる火山ガラス（35粒子）を対象に屈折率測定を行った結果、 $n: 1.498-1.506$ であった。これらのことは、今回の分析対象が浅間大窪沢第1軽石（As-Ok1, 約2万年前）や浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 約1.5～1.65万年前）などを噴出した浅間火山軽石流期以降の堆積物であることを示す。比較的腐植質であることを加えると、少なくとも明色の27層をのぞく土層が完新世堆積物であることが示唆される。

群馬県内では、完新世に形成された腐植質の黒土（黒ボク土）の中位に、縄文時代中期頃に自然の明色土層の存在が知られており、淡色黒ボク土と呼ばれている。少なくとも榛名二ッ岳渋川テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）より下位のB区西壁の7層を中心とした比較的明色の土層は、この淡色黒ボク土とは層位的に異なる。土層の基底が不明瞭なことについて、縄文時代における周辺の開発に伴って形成された可能性など検討する余地があるものの、今回の分析結果は、本地点において盛土が存在すると推定されていることとさほど

矛盾しないように思われる。

(2) Ca24・25グリッドのテフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析）の概要

テフラ検出分析で検出された火山ガラスのうち、試料3（3層）と試料1（2層）のいずれでも認められた淡灰色や淡褐色のスポンジ状軽石型ガラス、また試料3（3層）で認められた褐色のスポンジ状軽石型ガラスは、その特徴から、浅間Bテフラ（As-B, 1108年）に由来すると考えられる。3層と2層はAs-Bの一次堆積層ではない土層であることから、これらの土層がAs-B降灰後に形成されたと考えられる。

なお、これらの試料に含まれる無色透明のバブル型ガラスは、岩相から、始良Tn火山灰（AT, 約2.8～3万年前）に由来すると考えられる。さらに、中間型ガラスや繊維束状軽石型ガラスの多くは、やはり岩相から浅間火山軽石流期のテフラに由来すると考えられる。

今後、より下位の土層のテフラ分析を行う必要があるが、これまでに実施された周辺地点の分析結果をみると、本地点において認められた腐植質土層より上位の明色の土層の層位に関しては、As-Bより下位の可能性が十分にある。引き続き、本地点の残りの試料についても分析を実施して、明色の土層の層位を確かめる必要がある。

(3) Ca32・33グリッドのテフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析）の概要

テフラ検出分析で検出された火山ガラスのうち、試料5（4層）に含まれる淡褐色バブル型ガラスは薄手で、その色調も合わせると、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 約7,300年前）に由来する可能性が高い。

また、この試料に含まれる無色透明のバブル型ガラスは、岩相から、始良Tn火山灰（AT, 約2.8～3万年前）に由来すると考えられる。さらに、中間型ガラスや繊維束状軽石型ガラスの多くは、やはり岩相から浅間火山軽石流期のテフラに由来すると考えられる。これらATや浅間火山軽石流期のテフラに由来すると思われるテフラ粒子は、今回の分析対象のうち最下位の試料9（5層）にも比較的多く含まれている。さらに、

試料1（3層）にごくわずかに含まれる淡灰色や淡褐色のスポンジ状軽石型ガラスは、その特徴から、浅間Bテフラ（As-B, 1108年）に由来すると考えられる。

以上のことから、今回の分析対象となった試料9（5層）以上の土層は、少なくともAs-Ok1より上位にあることがわかる。しかも、5層が腐植質であることを合わせると完新世堆積物の可能性が高い。また、試料5が採取された4層上部は鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）降灰後、また試料1が採取された3層の上部は浅間Bテフラ（As-B）降灰後に形成された土層の可能性が高い。このうち、3層の上部については、検出された浅間Bテフラ（As-B）が非常に微量なことや、本遺跡周辺での降灰が知られている榛名二ツ岳洪川テフラ（Hr-FA）がほとんど認められないことから、比較的最近の攪乱の影響を受けて浅間Bテフラ（As-B）が混入しているのかも知れない。

（早田）

6. まとめ

今年度の調査成果について要点をまとめておく。

まず、A区については、A1～A7グリッド通しての土層堆積を確認すべく、A4～A6グリッドを中心に掘り下げたが、ローム層まで到達できなかった。そのため、十分な層位的検討はできていないが、A4～A6

グリッドの-150L付近で焼骨を中心とする骨片が集中する箇所を検出し、その周囲が複雑な土層堆積を呈していることが明らかになった。A1グリッドで8層とした箇所や、2次調査で確認したA7グリッド底面で検出したピットなどを含め、遺構の有無をはじめとする層位的再検討が今後の課題である。

B区は、新たな掘り下げは行っていないが、火山灰分析により、ローム層（27層）、近年の攪乱層（1・2層）と、縄文時代の掘り込み・包含層の区分を裏付けることができた。

C区についてである。昨年度、中央窪地のほぼ中央にC区としてトレンチを設定し、ローム層まで土層を確認したが、上層から中層まで中世における削平や攪乱を受けていることが確認され、さらにローム層自体も削平されている可能性があり、ローム層のどの位置が上面として検出されたかが不明であった。地表面での観察では、石造物などがある中央窪地中央付近から東側のクリ林と東側に接する畑地をみると、緩やかに傾斜が上がっており、クリ林の東端側と東側に接する畑地の付近に盛土が残存していると推測された。そこで、今回は昨年度の地点から東側のクリ林中にトレンチを5箇所設定して中央窪地から盛土に向かう堆積状況の確認を行った。その結果は、第6図-1に整理した。盛土付近と思われるCa24・25、Ca28・29、Ca32・33の3地点のトレンチでは、Ca24・25、Ca28・29地点のトレンチにおいて、ローム層にまでいたる中世以降の削平や攪乱を確認し、Ca32・33地点のトレンチにおいてはローム層のほぼ上面で縄文時代中期の遺構を確認した。地表面での想定通り、第3次調査のC地区トレンチからCa32・33地点のトレンチにかけて東側に向けてローム層は傾斜が上がっていることが判明した。ただし、Ca24・25、Ca28・29地点のトレンチでの中世以降の削平や攪乱が中央窪地にまで達しているかどうかは不明であり、今回の調査において、再度第3次調査のC地区トレンチを検討したところ、ローム層上面にまで中世以降の削平や攪乱が達しているかどうかとも不確定であると判断するに至った。中世以降の削平や攪乱が、どの程度環状盛土が形成されている時代の中央窪地中央付近から盛土にいたる地形に影響しているかどうかは、今後地点をかえて確認する必要がある。最も東側の盛土付近頂上付近と考えられたCa32・33地点のトレンチでは、ローム層上面において縄文時代中期の遺構を確認したことからすれば、場合によっては中世以降、特にクリ林の造成時に盛土の大部分が削平された可能性もある。クリ林中に大量の縄文時代後晩期の土器などが散布する状況は、そうした可能性を示しているのであろうか。

なお、Ca32・33地点のトレンチで縄文時代中期の遺構を検出したが、土器は縄文時代前期段階から認められ、さらに弥生時代前期の土器もある。今後、中根八幡遺跡の遺跡形成過程を考える上でC区での調査検討は重要であると考ええる。

(小林・中村)

付記

本調査は國學院大學栃木短期大学学長を主体者、調査団共同代表の小林・中村を担当者として、平成30年5月30日付で栃木県教育委員会教育長宛（栃木市教育委員会経由）で文化財保護法第92条に基づく発掘の届出を提出し、6月11日付で県教育長より実施許可の通知を得た。出土品については9月12日付で栃木警察署長へ埋蔵物発見届、県教育長宛に埋蔵文化財保管証を提出し、11月6日付で県教育長より文化財認定を受けた。また、前年度に引き続き「とちぎの古代遺産新発見PartⅢ」として栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業の助成を得た。

調査・整理・成果公開参加者（学年は2019年3月当時）

奈良大学：小林青樹（教授） 萱原朋奈 新里遥（大学院修士2年） 桐部夏帆（学部4年） 佐々木仁志（学部3年） 荒木清花

志原好 辛川あかり 中山雅士 吉村璃来 (学部2年)

國學院大學栃木短期大学：荒井泰三郎 石井俊祐 岩崎凧那 太田阿寿 小野梨奈 笠倉美歩 方波見睦美 金子隼斗 小澤歩実 小菅拓朗 小泊茅日 宍戸梢 佐藤太一 戸部美菜 萩原舞 橋本和奏 武藤裕亮 (日本文化学科2年) 嶋崎結 塩嶋匠 古澤美里 益子将太郎 (日本文化学科1年) 江俣結香 小野澤春乃 塩入秀華 中田帆南 中山奈美 沼澤佑貴 渡邊まみ (人間教育学科2年) 内山諒祐 (人間教育学科1年) 町田吉博 (科目等履修生) 酒寄雅志 (教授・日本文化学科長) 後藤正人 (教授・人間教育学科長) 早川富美子 (教授) 寺崎宣昭 (教授) 中村耕作 (准教授) 石坂昌園 (事務長) 岸美知子 (助手) 柿沼里恵子 (助手) 高垣美菜子 (学芸員) 伊沢加奈子 飛田彩哉子 菅田孝健 大谷舞菜 長谷川愛 依田健太 齊藤義人 (卒業生)

山梨県教育委員会：岩永祐貴 **早稲田大学**：中安真輝 **小山市教育委員会**：安良岡伸之 **鹿児島県埋蔵文化財センター**：郷原麻鈴

協力者

中根地区 中根八幡神社 栃木市 栃木市教育委員会 栃木市立小野寺南小学校 栃木県 栃木県教育委員会 栃木ケーブルテレビ 毎日新聞社 下野新聞社 FMくらら857

大島邦彦 坂本勝雄 熊倉教裕 石塚孝市 田村正昭 小島正明 福富林 谷内英樹 大出光一 栗田寿樹 尾島忠信 高見哲士 小澤美和子 石川由利子 猪瀬亜沙美 秋山隆雄 朝倉一貴 岩淵一夫 石上則子 岡山亮子 江原英 江原美奈子 大島亜里彩 大島孝博 小川勝和 小曾根葉月 小野澤美明子 加藤大二郎 後藤佳一 小林美貴 齊藤恒夫 柴田祐希 須田英一 須藤和佳 芹沢清八 曾我真実子 大工原豊 高村敏則 武川夏樹 田中和之 塚本師也 坪能由紀子 鳥海朱理 中島寿昌子 能登健 初山孝行 羽生田麻子 福富善明 福永将大 文挾健太郎

分析委託

火山灰分析：火山灰考古学研究所 (早田勉) **土壌同位体分析**：東京大学総合研究博物館 (吉田邦夫・宮内信雄・堀内晶子・松崎浩之) **動物骨同定**：阿部常樹 (國學院大學兼任講師)

本概要報告執筆者

小林青樹・中村耕作・早田勉・塚本師也・高垣美菜子・萱原朋奈・新里遥・桐原夏帆・佐々木仁志・荒木清花・志原好・辛川あかり・中山雅士・吉村璃来

引用文献

- 中根八幡遺跡学術発掘調査団 2016～2018 「栃木県栃木市中根八幡遺跡第1～3次発掘調査概要報告」『文化財学報』第34集～第36集
- 中村耕作・小林青樹・福永将大・岩永祐貴・新里遥・萱原朋奈 2018 「栃木県栃木市中根八幡遺跡における環状盛土遺構の調査－2015年度～2017年度の調査概要－」『日本考古学』第46号
- 早川富美子・中村耕作 2019 「発掘した縄文土器をもとにした音楽活動の試み－クロスカリキュラムの視点から－」『國學院大學栃木短期大学紀要』第53号

上記概要報告のほか下記において成果の一部を公表した

〔研究発表・報告会〕

- 福永将大・岩永祐貴・新里遥・萱原朋奈・中村耕作・小林青樹 2018.4 「環状盛土遺構の形成プロセス－栃木市中根八幡遺跡第3次発掘調査の成果－」考古学研究会第64回総会・研究集会 (岡山大学)
- 中村耕作・小林青樹・福永将大・早田勉・岩永祐貴・新里遥・萱原朋奈 2018.5 「環状盛土遺構の形成過程－栃木市中根八幡遺跡の研究3－」日本考古学協会第84回総会研究発表 (明治大学)
- 福永将大・中村耕作・小林青樹・小山内康人 2018.5 「栃木県中根八幡遺跡出土器の胎土分析」同上
- 早川富美子・中村耕作 2018.10 「縄文土器の破片を使ったクロック・オーケストラ音楽づくり－クロスカリキュラムの視点から－」

日本音楽教育学会第49回大会（岡山大学）
國學院大學栃木短期大学考古学研究会 2019.2 「中根八幡遺跡の発掘調査」國學院大學栃木短期大学平成29年度大学・地域連携プロジェクト支援事業報告会（國學院大學栃木学園教育センター）

〔展示〕

「奈良大学文化財学科研究教育最前線 2018」奈良大学博物館 2018.10.30～12.22
「平成30年度日本史系サークル合同展示」國學院大學栃木学園参考館 2018.11.3～

〔ミニ展示・ワークショップ〕

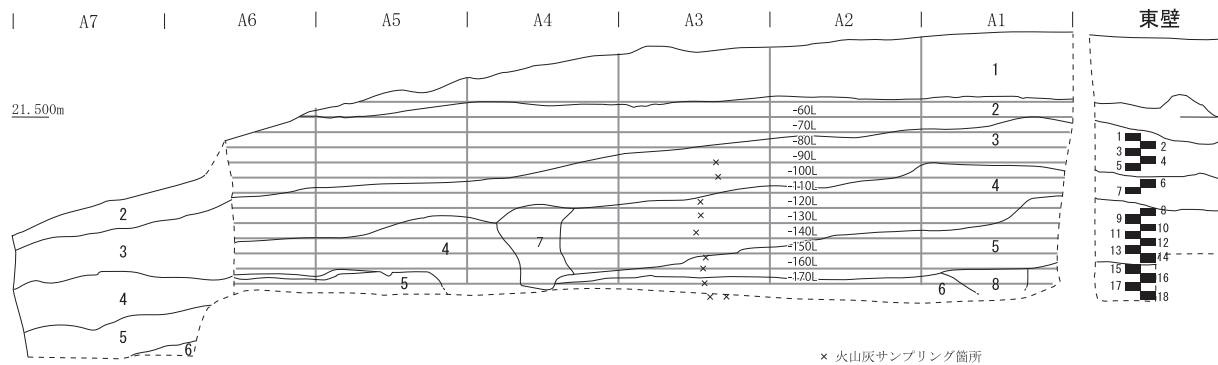
「中根八幡遺跡の調査成果」ふじおか産業祭 2018.11.18



0 S=1:1200 50m

環状盛土推定範囲
 実線：高まりを確認できる箇所
 鎖線：遺物の分布から推定した箇所
 点線：上記から推定した箇所

第1図 中根八幡遺跡の地形と調査区位置



- | | | | | | | |
|---|---------|-------|----------|---------------|----------|-------------|
| 1 | 表土 | 黒褐 | 10YR2/2 | しまり弱い | 現代のゴミを含む | 根攪乱 |
| 2 | 盛土層 | 黒褐 | 10YR3/2 | しまり弱い (1より強い) | 遺物を含む | |
| 3 | ローム再堆積層 | にぶい黄褐 | 10YR4/3 | v遺物含む | しまりやや弱い | 1mm程度の砂粒を含む |
| 4 | 盛土層 | 黒褐 | 10YR2/2 | 遺物を多く含む | しまり弱い | |
| 5 | 盛土層 | 暗褐 | 10YR3/4 | 遺物を含む | しまりやや弱い | |
| 6 | ローム層 | 黄褐 | 10YR5/6 | 遺物含まない | しまりやや強い | |
| 7 | 攪乱層 | 黒褐 | 7.5YR3/2 | しまりやや弱い | | |
| 8 | 漸位層? | にぶい黄褐 | 10YR4/3 | 遺物含まない | しまりやや強い | |

× 火山灰サンプリング箇所
 ■ 土壌分析用サンプリング箇所

第2図 A区北壁・東壁土層断面図 (S=1:50)



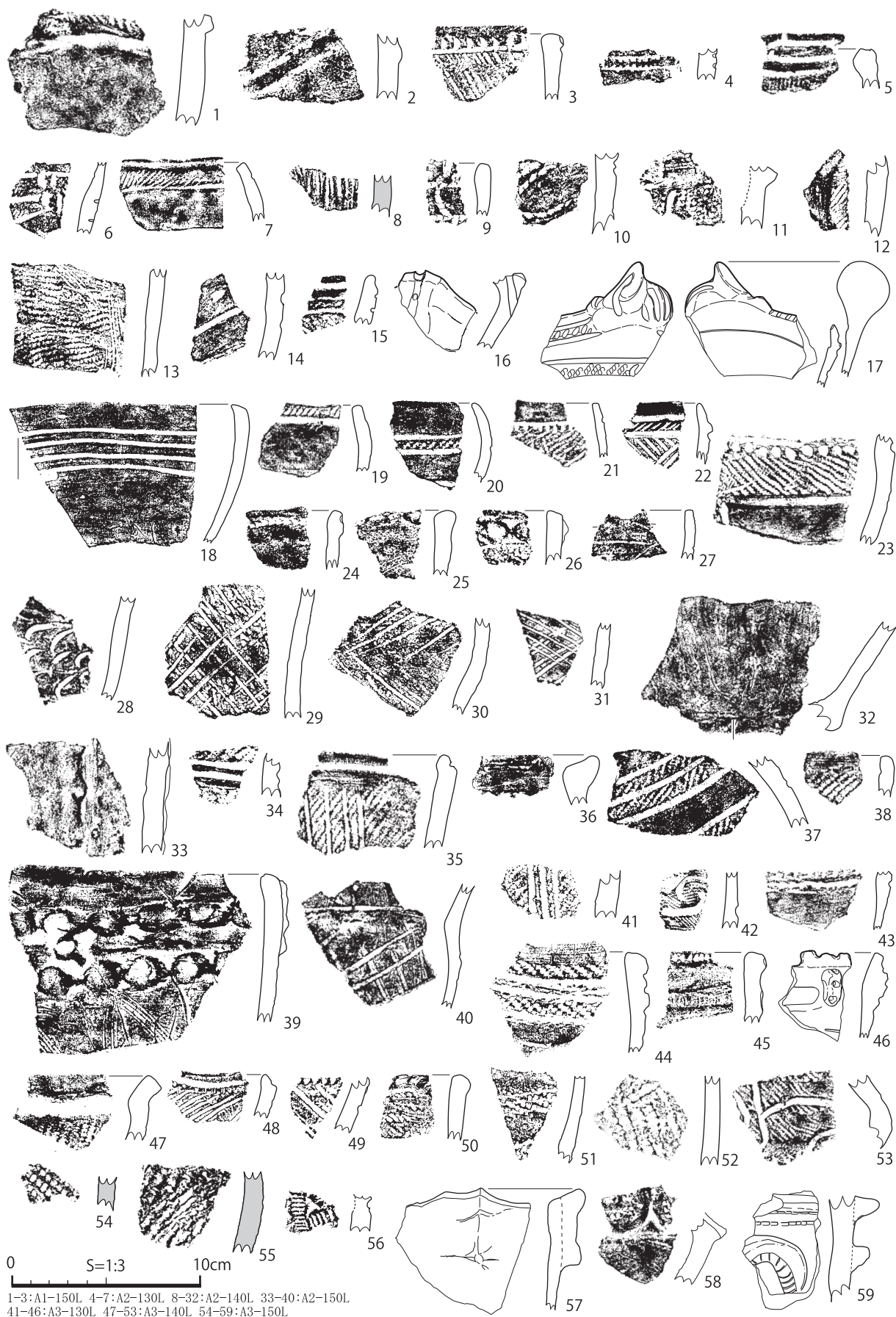
写真1 A区北壁 (A7) 土層断面



写真2 A区北壁 (A1~6) 土層断面



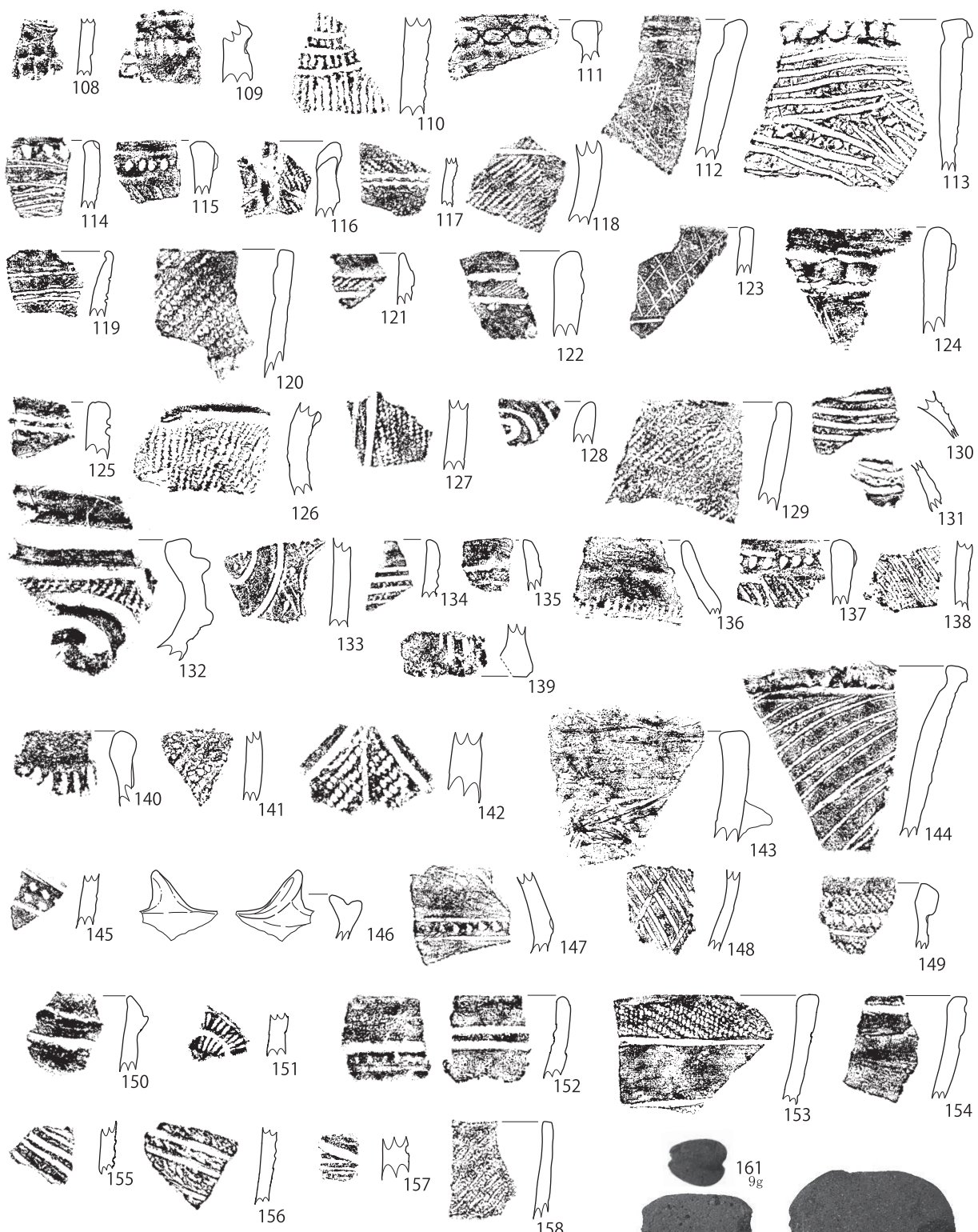
写真3 A区トレンチ全景 (東から)



第3图 A区出土遗物(1)

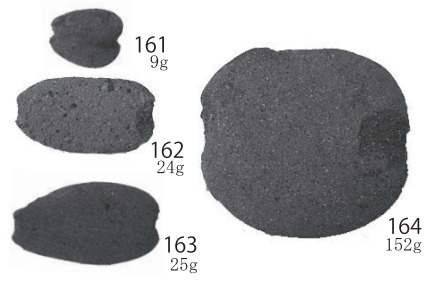
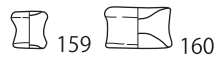


第4图 A区出土遗物(2)



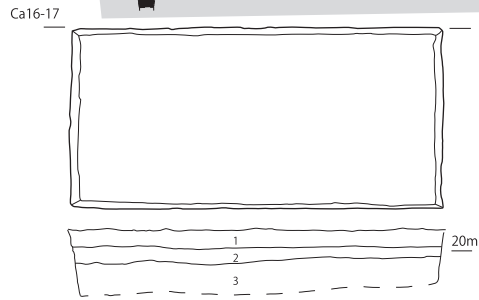
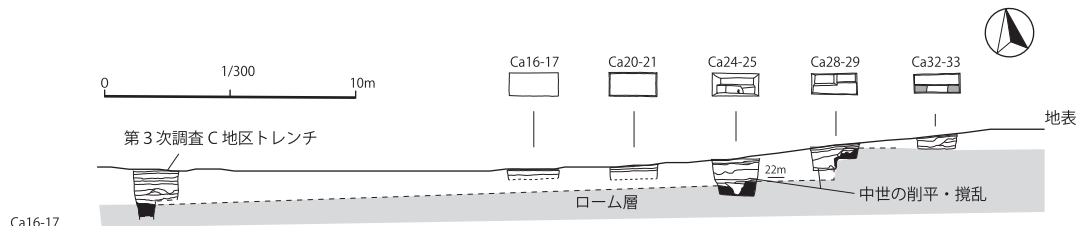
108-117:A5-150L 118:A5-160L 119-124:A5-170L
 125-131:A5-180L 132-139:A6-150L 140-141:A6-170L
 142-149:A7-5層 150-156:A7-4層 157-158:A7-3層
 159:A5-170L 160:A2-140L 161:A5-150L 162-163:A5-170L
 164:A5/A6

0 S=1:3 10cm
 159・160はS=1:2

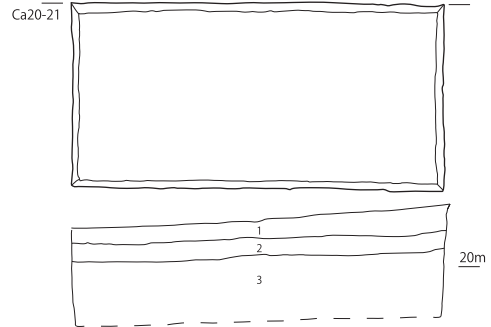


第5図 A区出土遺物(3)

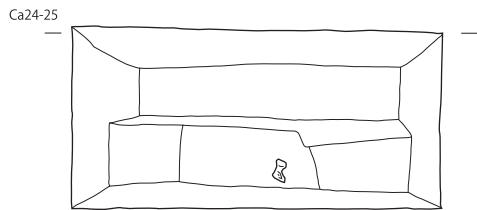
1. C区トレンチ配置図・中央窪地から東側盛土にかけての断面図 (S=1/300 黒塗りはローム層・灰色は想定されるローム層)



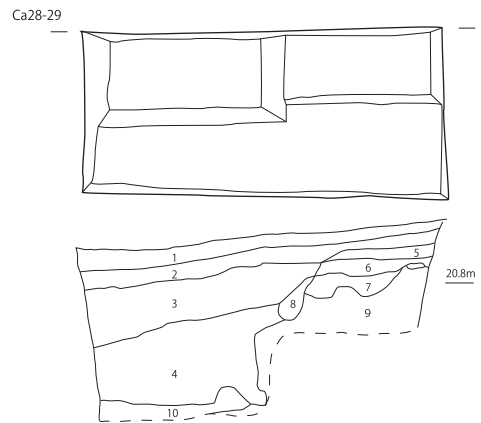
2. C区 Ca16・17 平面図・北壁断面図 (S=1/40)



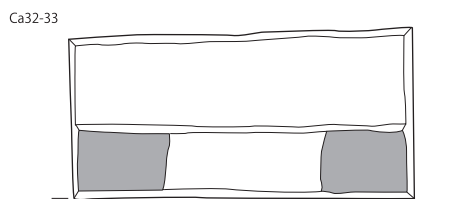
3. C区 Ca20・21 平面図・北壁断面図 (S=1/40)



4. C区 Ca24・25 平面図・北壁断面図 (S=1/40)



5. C区 Ca28・29 平面図・北壁断面図 (S=1/40)

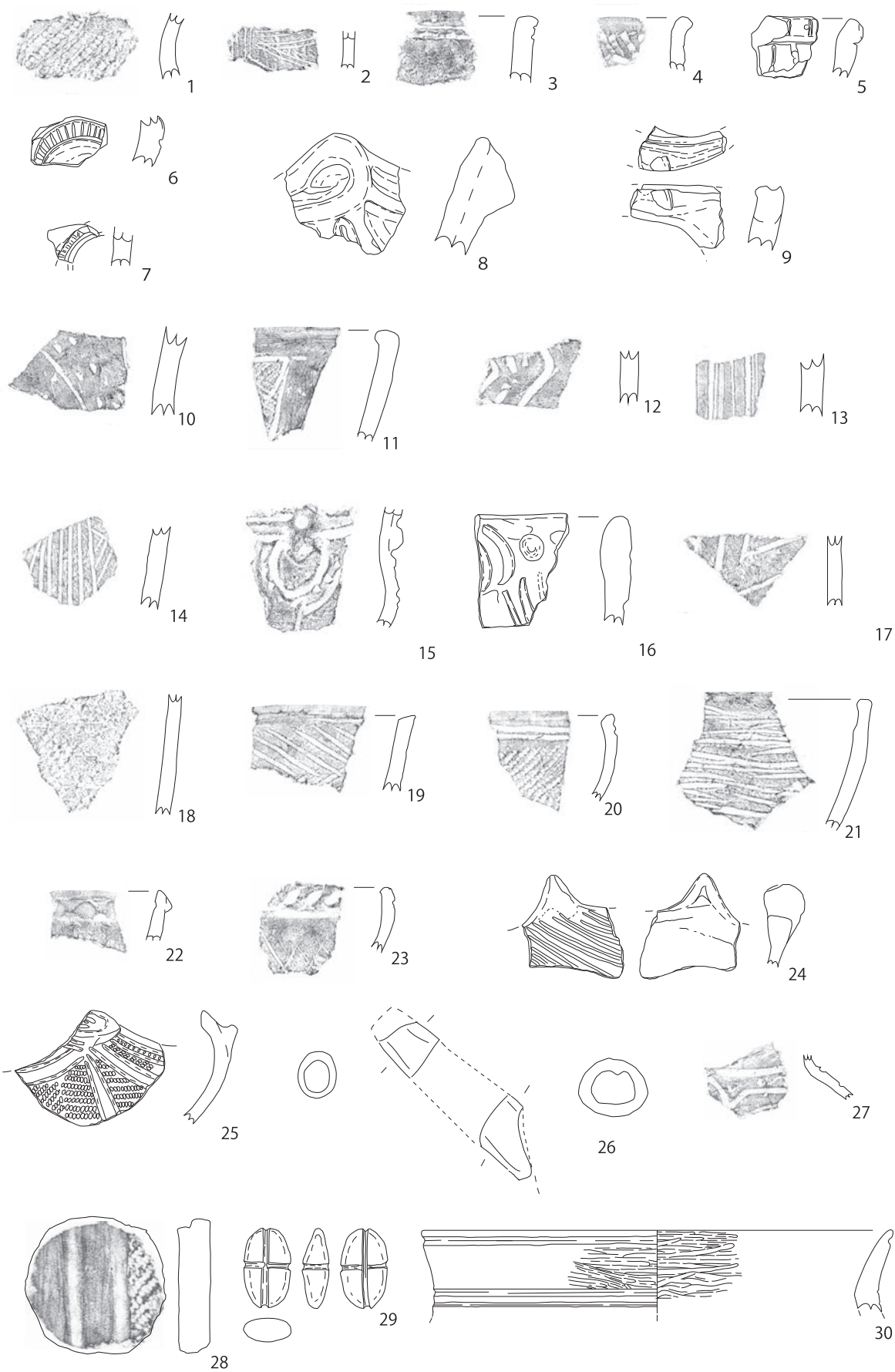


6. C区 Ca32・33 平面図・南壁断面図 (S=1/40)

※トーン部分は遺構プラン

第6図 C区トレンチ断面図

土層説明	
Ca16.17	1~3 Ca24.25と同じ
Ca20.21	1~3 Ca24.25と同じ
Ca24.25	1 7.5YR 3/1 黒褐 しまりが悪い砂質土 表土に相当 木の粗含む 2 5Y 4/2 灰オリーブ しまりが悪い砂質土 3 5Y 4/2 灰オリーブ しまりが悪い砂質土 土器と一部に炭を含む 4 2.5Y 4/2 暗灰黄 しまりが悪い砂質土 炭を含む 5 2.5Y 4/2 暗灰黄 しまりが悪い砂質土 土器を多く含む 6 2.5Y 5/6 黄褐 しまりが悪い砂質土 ロームブロック少量含む 一部炭含む 7 2.5Y 5/6 黄褐 しまりが悪い ロームブロック含む 明茶褐色土混じり 8 2.5Y 7/6 明黄褐 しまりが悪い 6層の土にローム層が混じる 9 2.5Y 4/3 オリーブ褐 しまりが悪い砂質土 土坑 10 2.5Y 4/2 暗灰黄 しまりが悪い砂質土 11 2.5Y 8/6 黄 しまりが良い砂質土 土器は含まず、スコリアを含む ハードロームに相当
Ca28.29	1 Ca24.25の1層と同じ 2 Ca24.25の2・3層と同じ 3 Ca24.25の4層と同じ 4 Ca24.25の5層と同じ 5 2.5Y 4/3 オリーブ褐 大きめのロームブロック含む ややしまらない 上下に乱れる 6 10YR 4/4 褐 ソフトローム(9層)に近いがロームを少し含むつつ、暗黄褐色をなす しまりが強い 7 10YR 4/4 褐 6層と同じ 8 10YR 4/4 褐 7層の崩れた層 ロームブロックを多く含む 9 5YR 6/8 橙 ソフトローム層 部分的に硬質なロームブロックを含み、粘性が強い 10 Ca24.25の5層にロームブロックが含まれる層
Ca32.32	1 Ca24.25の1層と同じ 2 7.5YR 3/2 オリーブ黒 ややしまりが粘性はなし ロームブロック粒子を少量含む 炭化物含む 3 7.5YR 3/2 オリーブ黒 2層とほぼ同じ 4 3層と同じ 5 10YR 4/2 灰黄褐 やや粘性がありしまり ロームブロックを少量含む



第7图 C区出土遗物

0 1/3 10cm

1. テフラ検出分析結果

地点	試料	土層	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物 (不透明鉱物以外)
			量	色調	最大径	量	形態	色調	
B区西壁	2	1層							opx, cpx
	4	2層			*	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白, 灰白		opx, cpx
	10	7層			(*)	md	無色透明		opx, cpx
	14	9層							opx, cpx
	18	11層							opx, cpx
	22	10層							opx, cpx
	24	19層							opx, cpx
	28	18層							opx, cpx, (am)
	30	28層							opx, cpx
	32	27層			(*)	bw	無色透明		opx, cpx, (am)
Ca24・25	1	2層			(*)	pm (sp), md	淡灰, 淡褐, 灰		opx, cpx
	3	3層			(*)	pm (sp), md	淡灰, 淡褐, 褐, 無色透明		opx, cpx, am
Ca32・33	1	3層			(*)	pm (sp), md, bw	淡灰, 淡褐, 無色透明		opx, cpx
	3	3層							opx, cpx
	5	4層			*	bw, pm (sp)	無色透明, 淡褐, 白		opx, cpx
	7	4層							opx, cpx
	9	5層							opx, cpx

****:とくに多い, ***:多い, **:中程度, *:少ない, (*):非常に少ない, bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, sp:スポンジ状, fb:繊維束状, ol:カンラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, am:角閃石, bi:黒雲母. 重鉱物の()は, 量が少ないことを示す.

2. 火山ガラス比分析結果

地点	試料	土層	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
B区西壁	2	1層	2	0	0	8	2	2	102	93	41	250
	4	2層	2	0	0	6	6	1	78	104	53	250
	10	7層	3	0	0	23	2	1	92	89	40	250
	14	9層	1	0	0	17	1	1	127	57	46	250
	18	11層	5	0	0	24	4	10	112	76	19	250
	22	10層	0	0	0	28	2	6	114	77	23	250
	24	19層	2	0	0	17	0	5	118	86	22	250
	28	18層	1	0	0	16	2	4	105	91	31	250
	30	28層	1	0	0	19	3	4	108	95	20	250
	32	27層	2	0	0	12	2	2	90	116	26	250
Ca24・25	1	2層	1	0	0	9	3	2	94	90	51	250
	3	3層	0	0	0	7	3	3	89	98	50	250
Ca32・33	1	3層	6	0	0	15	2	5	103	70	49	250
	3	3層	2	0	0	14	2	2	121	77	32	250
	5	4層	2	0	0	26	3	7	107	63	42	250
	7	4層	3	0	0	21	4	5	108	73	36	250
	9	5層	0	0	0	14	2	4	138	69	23	250

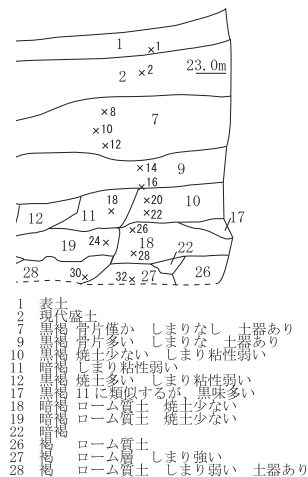
bw:バブル型, cl:無色透明, pb:淡褐色, br:褐色, md:中間型, pm:軽石型, sp:スポンジ状, fb:繊維束状. 数字は粒子数.

3. 重鉱物組成

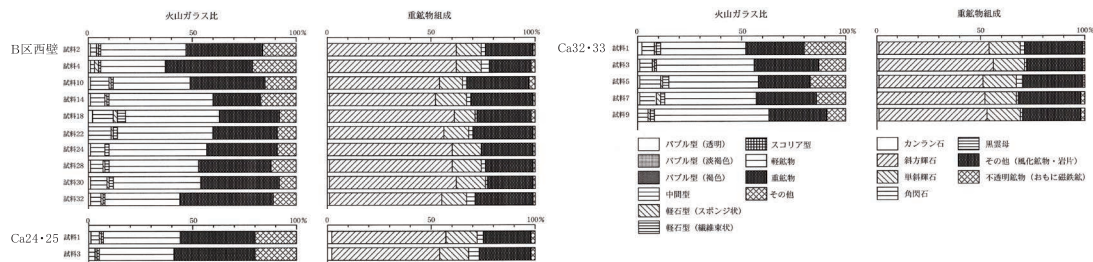
地点	試料	土層	ol	opx	cpx	am	mc	opq	その他	合計
B区西壁	2	1層	0	156	29	5	0	57	3	250
	4	2層	1	155	31	9	0	50	4	250
	10	7層	2	135	27	4	0	75	7	250
	14	9層	3	129	38	4	0	74	2	250
	18	11層	3	148	26	2	0	66	5	250
	22	10層	2	138	30	4	0	74	2	250
	24	19層	0	151	35	0	0	62	2	250
	28	18層	2	147	35	6	0	58	2	250
	30	28層	2	154	34	2	0	56	2	250
	32	27層	2	138	30	9	0	70	1	250
Ca24・25	1	2層	5	136	38	8	0	57	6	250
	3	3層	4	130	36	12	0	64	4	250
Ca32・33	1	3層	1	135	37	4	0	72	1	250
	3	3層	2	137	37	2	0	69	3	250
	5	4層	1	126	39	7	0	74	3	250
	7	4層	0	130	38	3	0	75	4	250
	9	5層	1	133	40	1	0	70	5	250

ol:カンラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, am:角閃石, mc:雲母, opq:不透明鉱物. 数字は粒子数.

5. B区西壁土層断面図 (S=1:40)



4. テフラ組成ダイアグラム



第8図 火山灰分析結果